



大阪部会(第16回)

日時: 2009年12月12日(土)16:00~18:00

場所: 同志社大学 大阪サテライト

【内容要旨】

- (1) 第16回目の大阪部会は12名の参加者で開催された。まず初めに、経済教育ネットワークの篠原総一代表者から、12月に福井で行われた経済教育ワークショップの報告と、来年3月20日(土)に開催予定の入試問題検討シンポジウムについての予告があった。さらに、中国における学習指導要領について聞き取り調査中の中間報告もなされた。
- (2) 引き続き、小宮山幸男氏(兵庫県立明石南高等学校)から「高校現代社会における経済教育実践報告」と題して、1年次の現代社会における指導計画について話された。その中で特に強調されたのは、最初の段階で生徒との人間関係がうまく構築できるか否かで、その後の授業の進め方が大きく変わってくるということであった。構築関係がうまく行くと、教科書以外の内容を教えることの意義を理解させるのが容易になる。また、地理歴史を学んだ後で政治・経済を教えるほうがやりやすいとの意見であった。さらに、経済教育では物語風に教えるのがベストであるが、すべての項目を物語風に教えることの難しさがあることも指摘された。
- (3) 次に、宮尾尊弘氏(筑波大)が国際教養大学の講義で実験された「囚人のジレンマと繰り返しゲーム」について、篠原総一氏がその概要を紹介した。宮尾氏による実験の目的は、個人の利益と社会の利益が相反することを理解させることと、「しっぺ返し」戦略の有効性について気づかせることにあった。ゲーム自体は非常にシンプルで取り組みやすい印象を受けたが、ゲームの意義を現実の例に照らし合わせるケースが簡単に浮かんでこなかった。そこで、このゲームの趣旨に合う現実の例を次回まで考えて欲しいという要望が出された。
- (4) その後、京都府立山城高等学校における篠原総一氏の講演についての紹介があった。その要諦は、『政治・経済』の教科書で「国際経済」の単元をどのように教えるかの問題提起であった。特に、為替レートが通貨と通貨の交換比率であることを理解させたうえで、外国為替取引の大半は国際間の資金取引に関わっているため、為替レートの決定には日本と外国の利子率および将来の為替レートの予想に依存していることを教える大切さを強調された。これについて理解を深めるために、中国北京市で出題された入試問題(資金を中国で運用するか、あるいは、外国で運用するかを計算させ、為替レートがどのように決まるかを答えさせる問題)が紹介された。

(文責: 西村理)